慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゲーテの最後の自伝プロジェクト： 『私のその他の告白の補足としての年代記』成立事情
Sub Title	Das letzte autobiographische Projekt von Goethe : Die Entstehungsverhältnisse der Tag-und Jahreshefte
Author	山本, 賀代(Yamamoto, Kayo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.48 (2011.) ,p.283- 307
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	伊藤行雄教授 退職記念号 = Sonderheft für Prof. Yukio ITO
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20110331-0283

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゲーテの最後の自伝プロジェクト

――『私のその他の告白の補足としての年代記』成立事情――

山　本　賀　代

はじめに

ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ Johann Wolfgang Goethe（1749–1832 年）は多数の自伝的著作を残した。もっとも有名な作品は『わが生涯から――詩と真実』*Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit*（1811 年第 1 部出版，1812 年第 2 部出版，1814 年第 3 部出版，第 4 部は未完のまま，ゲーテ死後，1833 年に出版，以下『詩と真実』）であるが，それ以外にも多様な形式で自分の生涯について記述している。『イタリア紀行』*Italienische Reise*（最初は 2 分冊で 1816 年に『わが生涯から――第 2 部門第 1 部』，1817 年に『わが生涯から――第 2 部門第 2 部』として公表され，1829 年に先の 2 分冊に『第二次ローマ滞在』が加わり，全体として『イタリア紀行』となる）をはじめとする大小の旅行記，『滞仏陣中記 1792 年』*Campagne in Frankreich 1792*（1822 年）および『マインツ包囲』*Belagerung von Maynz*（1822 年）――この 2 作品は 1822 年の初版ではまとめて『わが生涯から――第 2 部門第 5 部』として出版された――と

テクスト： Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. Hg. von Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert G. Göpfert u. a. München 1985–1998. 同全集からの引用・参照は本文中に巻数，（部数），ページ数のみを示す。

いった戦争手記，そして 1749 年から 1822 年までの年ごとの活動記録をストイックにまとめた『私のその他の告白の補足としての年代記』*Tag- und Jahreshefte als Ergänzung meiner sonstigen Bekenntnisse*（1830 年，以下『年代記』）などである。

自分自身の生涯に目を向ける以前には，ゲーテは他者の自伝や伝記にも大きな関心を寄せた。小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』*Wilhelm Meisters Lehrjahre*（1795–96 年，以下『修業時代』）の第 6 巻「美しき魂の告白」のもととなったクレッテンベルク嬢の信仰告白はその初期の例である。ルネサンスの彫刻師ベンヴェヌート・チェリーニの自伝を高く評価し，1803年，自ら翻訳（*Leben des Benvenuto Cellini, Florentinischen Goldschmieds und Bildhauers, von ihm selbst geschrieben*）して出版した。ヨーハン・ヨアヒム・ヴィンケルマンやフィリップ・ハッケルトの小規模な伝記 ——『ヴィンケルマンとその世紀』*Winkelmann und sein Jahrhundert*（1803 年），『フィリップ・ハッケルト』*Philipp Hackert*（1811 年）——が書かれ，『色彩論』*Farbenlehre*（1810 年）の歴史編は，多数の自然科学者たちの伝記的記述によって構成された。この傾向は『西東詩集』*West- östlicher Divan*（1819/1827 年）の「注解と論考」にも認められるだろう。他者の伝記に従事しているうちに，「なぜ私は，他人に対してすることを自分自身に対して企てないのだろうか」（14–220）と考えるようになったゲーテは，1809 年，60 歳を迎えた年に『詩と真実』の最初の構想に着手した。

そもそも 1800 年前後はヨーロッパにおける自伝文学の歴史において画期的な時代であった。ジャン＝ジャック・ルソー Jean-Jacques Rousseau（1712–1778 年）の『告白』*Confessions*（1782 年）が現れ，歴史的な回想録やアウグスティヌスにまで遡る宗教的な信条告白といった伝統は大きな転回点を迎えた。ルソーの『告白』とともに，近代市民のアイデンティティを探求する手段としての自伝形式がにわかに脚光を浴び，新たな文学ジャンルが確立されることになった。近代的自伝の周辺には日記や手紙と

いう関連ジャンルが存在し，いずれも当時のヨーロッパ市民文化を特徴づける特別な現象である。もちろんゲーテも大量の日記や手紙を残した。しかも純粋に実用的な日記，手紙という形式が，文学形式，とりわけ小説という新しく勃興した近代市民たちの文学形式へと流入し，この時期の小説ジャンルの発展に大きく寄与していた[1)]。周辺ジャンルと相互に影響を及ぼしあいながら，ヨーロッパにおける近代的自伝文学の歴史が始まるわけだが，自伝が文学研究の美的考察対象として市民権を獲得するにはまだ長い年月を要することになる[2)]。ゲーテの『詩と真実』は，ドイツの自伝文学の発展期におけるひとつの頂点として，その後の自伝作品の模範とみなされるが[3)]，近代ヨーロッパの自伝文学の歴史のなかに『詩と真実』を位置づける研究を見いだすことはまだ難しい[4)]。

1）ゲーテ時代の自伝と小説との関係については Klaus-Detlef Müller: *Autobiographie und Roman. Studien zur literarischen Autobiographie der Goethezeit*. Tübingen 1976.

2）ヨーロッパの自伝研究が活発化するのはフィリップ・ルジェンヌの研究以後である。本稿執筆にあたり参考にした主な自伝研究訳書は以下のとおり。フィリップ・ルジェンヌ『フランスの自伝――自伝文学の主題と構造』小倉孝誠訳　法政大学出版局　1995 年（原著 1971 年），同『自伝契約』井上範夫他訳　水声社　1993 年（原著 1975 年），ウィリアム・C・スペンジマン『自伝のかたち――文学ジャンル史における出来事』船倉正憲訳　法政大学出版局　1991 年（原著 1980 年），ライオネル・トリリング『＜誠実＞と＜ほんもの＞――近代自我の確立と崩壊』野島秀勝訳　法政大学出版局　1989 年（原著 1971 年）。また，ドイツにおける欧米の自伝研究のアンソロジーとして Günter Niggl (Hg.): *Die Autobiographie. Zu Form und Geschichte einer literarischen Gattung*. Darmstadt 1989 (Wege der Forschung).

3）Günter Niggl: *Geschichte der deutschen Autobiographie im 18. Jahrhundert. Theoretische Grundlegung und literarische Entfaltung*. Stuttgart 1977.

4）そもそもゲーテ研究のなかでも，他の晩年の作品同様，『詩と真実』に関するモノグラフィーは少ない。近年は『詩と真実』をゲーテの人生から解放し，独立した美的テクストとして，とりわけ詩学的な解釈が進められている。Bernd Witte: *Autobiographie als Poetik. Zur Kunstgestalt von Goe-*

しかもゲーテの自伝へのこだわりは『詩と真実』を生み出しただけではなかった。本稿で注目したいのは，むしろゲーテの一連の自伝プロジェクトのなかでもっとも包括的かつ断片的で，「わが生涯から」シリーズとは対照的な自伝的著作『年代記』の成立事情である。前者が文学的自伝と呼ばれるのに対して，後者を自律した美的作品として扱う研究はほとんど存在せず，もっぱら伝記的資料として利用されてきた。たとえばミュンヒェン版ゲーテ全集の解説には，『詩と真実』など他の自伝作品とは異なり，ゲーテは『年代記』を芸術作品として執筆したのではなく，主に自分の公的活動について弁明する「事業報告書」として制作したと論じられている[5)]。フランクフルト版の全集でも，詩的ではなく歴史編纂であると指摘される[6)]。本稿も『年代記』を文学作品として解釈するものではないが，一連の自伝プロジェクトのなかでゲーテ自身が最後に公表した『年代記』の成立事情を跡づけながら，ゲーテの晩年の創作全般を特徴づける断片性が，彼の自伝プロジェクトの経過においても顕著化することを明らかにしたい。小説『修業時代』から『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』*Wilhelm Meisters Wanderjahre oder die Entsagenden*（1821/29 年，以下『遍歴時代』）への変容は，自伝プロジェクトにおいて，『詩と真実』から『年代記』への変容としてくり返されると言えるだろう。第 1 章では，内容的にも形式的にも「近代の断片性」を主題とするゲーテの最後の小説

---

thes „Dichtung und Wahrheit“. In: *Neue Rundschau* 89 (1979), S. 384–400; Giesela Brude-Firnau: *Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit (1811–31)*. In: Paul Michael Lützeler u. a. (Hg.): *Goethes Erzählwerk. Interpretationen.* Stuttgart 1985, S. 319–343; Gabriele Blod: *„Lebensmärchen“. Goethes „Dichtung und Wahrheit“ als poetischer und poetologischer Text*. Würzburg 2003.

5）Kommentar von Reiner Wild. In: 14–616ff.

6）Kommentar von Irmtraut Schmid. In: Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. 40 Bde.* Hg. von Hendrik Birus u. a. Frankfurt am Main 1987ff. [=FA] I. Abteilung: Sämtliche Werke Bd. 17, S. 508.

『遍歴時代』に埋め込まれたアルヒーフ構造を紹介する。小説空間に実際に登場するアルヒーフは，現実のゲーテの仕事部屋につくられたアルヒーフをモデルとしていると考えられる[7]。それは『年代記』の執筆のためにつくられたものであった。第2章では，あまり知られていない『年代記』の成立事情を紹介する。最後に第3章では，『詩と真実』や『遍歴時代』など他作品との関連において，『年代記』に認められるゲーテの晩年のスタイルについて考察する。

1　アルヒーフ小説『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』[8]

『遍歴時代』には，アルヒーフに保管された多種多様な資料から「ひとつの小説」を制作している架空の編集者が登場し，彼の執筆する小説こそが読者の読む『遍歴時代』そのものである，という「アルヒーフ小説」の枠組みが構築されている。この複雑な構造をもつ小説は，情報の増大，歴史化，そして主体としての近代的人間の誕生のもとで，世界が観察不可能・描写不可能なものに変容し，代表あるいは反映としての従来の芸術が危機的状況に陥ったことを宣言している。絶対的な知に到達することのできない主観的近代人と知との新たな関係のなかに，ゲーテは芸術の生き延びる可能性を模索していると言える[9]。

1巻10章で，読者はマカーリエのアルヒーフの起源について知ること

7）本稿で詳しく紹介するように，ゲーテのアルヒーフは1822年につくられたもので，『遍歴時代』の初稿（1821年）にはまだアルヒーフは登場しない。

8）この章の内容は，拙稿　*Von der Aktenführung bis zur Archivpoetik. Goethes Archivroman „Wilhelm Meisters Wanderjahre“*『ゲーテ年鑑』50号　日本ゲーテ協会　2008年　41–59ページと一部重複している。詳しくは拙稿を参照。

9）シュテッフェン・シュナイダーは，このような新しい文学構想を「アルヒーフ詩学」と名付け，『ファウスト』第2部の分析を行なっている。Steffen Schneider: *Archivpoetik. Die Funktion des Wissens in Goethes „Faust II“*. Tübingen 2005.

ができる。このアルヒーフは，「枝の多い植物から種子が飛び出すように，精神豊かな会話から飛び出してくる個々の素晴らしい思想」（17–355）を記録し，保存しておくように命じられた書記アンゲーラによって管理されている。

> 「人は，現在のものをしっかりつかむことに忠実であればこそ，はじめて伝承のものに喜びを感じるようになるのです。もっとも良い思想はすでに述べられ，もっとも好ましい感情はすでに表現されているのですから。そうすることで，私たちはあの調和を直観することができるのです。これこそ人間が達するべきところであり，しばしば自分の意志に反してでも達するようにしなければなりません。というのも，人は，世界は自分とともに新しく始まるのだと想像したがるものですから」とご主人さまはおっしゃいます。（Ebd.）

近代的主体は，アルヒーフによって幻想から身を引き離し，世界との調和を見いだすことができるとみなされている。そして実際のアルヒーフは，次のような空間として描写される。

> それからわれわれの友はある部屋に案内された。その部屋にはぐるりと戸棚が置かれ，その中にはよく整頓されたたくさんの書類が並んでいた。さまざまな項目がきわめて多様な内容を示し，見識と秩序がはっきりと現れていた。（17–356）

簡潔に描写されるこの空間こそこの小説の中心点を形成している。世界に関するさまざまな情報の山は，このアルヒーフのなかでは見識と秩序に制御され，静かに眠っている。たとえば教育州の山祭り（2 巻 9 章）で議論になり主人公を悩ませる地球生成の諸説も，この戸棚のどこかに収められているのだが，描写される祭りの夜のように，人々が一斉に口を開いて，

ヴィルヘルムを混乱させることはない。彼は落ち着いて，ひとつひとつの主張と向き合うことができるだろう。のちには，ここに収められるべきレナルドーの日記の読者になり，またヴィルヘルム自身の書いたものも，このアルヒーフに収められることになる。他者の文書を読んだり，自分の文書が読まれたりするこの空間は，人間同士の関係を築くという意味でも，重要な役割を果たす。一見すると孤独な読書のようだが，山の祭りでの喧噪としての討論の場面よりも，ヴィルヘルムにとってはずっと心地よい，ゆるやかな，しかし確実なコミュニケーション空間が形成される。彼はゆっくりと世界と結びつき，自他との絶えざるコミュニケーションを行なうことができるのだ。

このアルヒーフの本質は水銀のメタファーを用いて表現されている。

> アンゲーラはさらに続けて，こうしてひとつの重要なアルヒーフが生まれたこと，眠れぬ夜にはよくそのなかの一葉をマカーリエに読んできかせることを客に打ち明けた。するとそのような折りには，あたかも一塊の水銀が落ちて，四方八方に散ってきわめて多彩な無数の小さな玉に分裂するかのように，奇妙にも千々の細々したことがらが飛び出してくる，と言うのだった。（17–355）

無数のテクスト，無数の情報，無数の声は，アルヒーフのなかでは水銀の玉のように一塊に結合している。しかしひとたび利用者が参入すると，それはちりぢりに分解していく。飛び散った小さな水銀の玉に利用者は新たな結合を与えることもできるだろう。水銀の玉は好んでまた結合するだろう。ちりぢりに飛び散る小さな水銀の玉をどのように結合させるのか，あるいは分解させるのかは，アルヒーフの利用者自身に任されている。この利用者とは，ヴィルヘルムであり，アルヒーフ小説の編者であり，ゲーテであり，そしてアルヒーフ小説の読者である私たち自身なのだ。架空の編者の執筆行為は，この水銀の玉の新たな結合のひとつの可能性にすぎない。

『遍歴時代』のような複雑な構造をもつ小説が生まれた背景に，近代においてすべてを包括する知は存在しない，ひたすら増殖する情報の渦のなかで，真理は目に見えないものになってしまったという近代人の不安を読みとることができる。しかし小説内に描かれた小さなアルヒーフの空間が，主人公ヴィルヘルムに心の安らぎを与えてくれる。無数のテクスト，無数の情報，無数の声は，アルヒーフのなかでは静かに，まるで水銀の玉のように一塊に結合している。それが分解するも，あらたな結合を結ぶも，関与する利用者次第である。そもそもこの小説そのものが，このアルヒーフへのひとりの編者の関与から生じた分解とあらたな結合の産物なのである。それはたとえばモザイク画のようなものであり，複雑な構造と呼ぶべきものではないのかもしれない。

また，ヴィルヘルムが望んでやまない真理は『遍歴時代』のなかで「永遠に活動的な生命」（17–539）とも言い換えられる。この「永遠に活動的な生命」のために晩年のゲーテ自身が必要としたのが，彼のあらゆる書類を分類し保管するアルヒーフであった。このアルヒーフは 1822 年 9 月に彼の仕事部屋の一角に現実のものとして誕生した。それは大げさなものではなく，ただの書類棚にすぎなかったが，この小さな空間が晩年のゲーテの創作活動の舞台となる。

2 『年代記』の成立事情

ゲーテは 1790 年代後半以降，自分の人生や作品に関わるさまざまな書類を大切に保管し，また友人たちの手を借りてかき集めてきた。しかし自身の草稿や他者の文書をも含む資料は膨大になりすぎて，見渡しがたいものとなった。そこで 1822 年，書記クロイター Friedrich Theodor David Kräuter（1790–1856 年）に命じ，一夏かけてこの書類の山を整理し，項目別に分類させ，その目録を作らせた。1823 年，雑誌『芸術と古代』*Über Kunst und Altertum* に掲載した自伝に関する短いエッセイのなかで，ゲーテはこの出来事を紹介している。文章は 3 部に分かれ，それぞれ目

次には「自伝」「詩人と著作家のアルヒーフ」「簡単な人生の告白」というタイトルが付いているが，後にエッカーマン Johann Peter Eckermann（1792–1854年）はこれらをひとつに取りまとめ，「伝記的年代記の成立」*Entstehung der biographischen Annalen* と名付けた。ゲーテの最後の自伝的著作『年代記』は，成立過程においてさまざまに呼ばれていたが，特に Annalen と呼ばれた時期が長かった。「詩人と著作家のアルヒーフ」には次のような記述がある。

> ひとりの若い，書誌学に通じた新入りの男が，この夏に，印刷されたもの，印刷されていないものばかりでなく，まとまりのあるもの，ないものを完璧に分類してくれました。そればかりか，日記，出した手紙，もらった手紙をもひとつのアルヒーフにしてくれたのです。このアルヒーフについての目録は，一般的な項目そして特別な項目，ABC，番号にしたがって，完成して私の手元にあります。こうして私のこれからの仕事は非常に促進されましたし，私の遺稿の心配をしてくれる友人たちにとっても，最善の仕事がなされたわけです。（14–574f.）

当時はまだ作家個人のアルヒーフという概念は存在しなかったにもかかわらず，現在，ヴァイマルにあるゲーテ＝シラー・アルヒーフの原型がこうしてゲーテ自身の手によって基礎づけられた。

ここで言及されている「私のこれからの仕事」とは何を指しているのだろうか。1822年5月に決定版全集[10]の企画がわき起こり，ゲーテはこの

10）ゲーテはコッタ社から生涯3つの全集を出すことになるが，その最終版であり，作家ゲーテの集大成となる。1827年から1830年までに全40巻が刊行される。もっとも40巻本という構想段階でゲーテはすでに自然科学研究関連の著作を別巻にすることを計画し，さらに最初の40巻に収まりきらない文学作品・美学論文も別巻に加えられる。ゲーテはエッカーマンを編者に指名し，編集の仕方を指南していた。ゲーテ死後，1832年に15巻

全集のために未完成のいくつもの作品を完成させるつもりで，自分の書類に目を通し始めていた。もちろんもっとも重要な課題は『ファウスト』第2部 *Faust II*（1832年）の完成であるが，未完成の仕事のなかには，1816年の構想以来，停滞したままの『年代記』も含まれていた。他の自伝的著作に関しては，1822年の時点で『詩と真実』はすでに3部まで公表され，4部はリリーへの配慮から執筆を中断していた。2つの戦争手記も同年，公表され，『イタリア紀行』は「第二次ローマ滞在」を残すのみとなっていた。

この停滞中の『年代記』が着手されるきっかけとなったのは，ゲーテによれば，ひとつ前の第2次ゲーテ全集，つまり1815年から1819年にコッタから出版された20巻本の全集を編集していた際に，「おせっかいな読者」から届いた「年代順に作品を並べてほしい」という要求であった[11)]。というのもゲーテは自分の全集を編集する際，常に作品を年代順に並べることをしなかったのだ。1816年4月26日付け『教養人のための朝刊』*Morgenblatt für gebildete Stände* に掲載した広告文「新しいゲーテ全集について」*Über die neue Ausgabe der Goethe´schen Werke* で，ゲーテは自身をシラーと対比させて，次のように反論している。

> それに対して［シラーとは違って］ゲーテの作品は，段階的に発展するのではなく，あちこち歩きまわるのでもなく，ある中心点からあらゆる方面に同時に試み，近くにも遠くにも影響を及ぼそうと努め，突き進んだ道を永遠に離れるかと思えば，他の道からはいつまでも離れない，そんな才能がもたらした産物なのである。たとえさまざまな作

本の遺稿集出版が取り決められたが，最終的には20巻となった。ゲーテの作品集企画をめぐる状況についてはジークフリート・ウンゼルト『ゲーテと出版者――一つの書籍出版文化史』西山力也訳　法政大学出版局　2005年（原著1991年）が詳しい。

11）1816年2月26日，コッタ宛て書簡。FA II, Bd. 7, S. 568f.

> 品を，その成立年代順に順序立てて配列することが可能であるとしても，著者が同時に取り組んでいた作品をひとつの巻にまとめようとすれば，きっとそこには奇妙な混合物が生じることであろう。（11–2–211）

その一方で，読者のために次のような約束もした。

> 著者にあらゆる正当な希望を受け入れる熱意があることを示すために，彼はこの新作品集に一本の論文を付け加えるつもりである。その論文は，いくつもの告白のなかですでに言われたことを簡単にくり返し，まだこれから言われるべきことを，やはり簡単に，しかし十分に提供することになるだろう。（11–2–212）

これが『年代記』計画の始まりとなった。しかしこの計画は一向に進まず，結局，解説もない作品成立年表が全集第 20 巻の付録として収められた。弁明の言葉のなかでゲーテは，自分の作品を連続的に扱うことは非常に困難であり，そのために自分は以前に 5 冊もの自伝的作品を発表しなければならなかったのだ，と述べている（11–2–251f.）。もちろんこの 5 冊とは，『わが生涯から』と題されてすでに発表された『詩と真実』の第 1 部，第 2 部，第 3 部，およびのちに『イタリア紀行』と呼ばれる『わが生涯から——第 2 部門』の第 1 部，第 2 部を指している。

作品を成立順に並べてほしいと読者からリクエストされる状況は，すでに『詩と真実』第 1 部の序言のなかでも言及されており，そもそもゲーテが自伝的著作を書く決心をしたきっかけとされていた。しかしこの状況はゲーテがつくりだしたフィクションにすぎない。時間を遡り，『詩と真実』第 1 部の序言で紹介される，ある友人からの手紙を取りだしてみよう。

> 敬愛なる友よ，今，われわれは 12 巻のあなたの文学作品を手元にそ

ろえました。目を通してみますと，すでに知っている作品もあれば，まだ知らない作品もあります。すでに忘れてしまった作品は，この全集によって記憶を新たにされます。同じ装幀で目の前に並ぶこの 12 巻を，われわれはひとつの全体とみなさずにはいられませんし，この全集から著者の姿や著者の才能がどのようなものかを思い描いてみたくなります。［……］また個々の作品に接すれば，たいていは特殊なきっかけからこれらの作品が生まれたということ，特定の外的対象や決定的な内的発展段階がこれらの作品から現れていること，そして，そこには一時的な道徳的および美的主義や確信が少なからず支配していることなどが，必ず明らかになります。ところが全体としては，これらの作品は常になんの関連もないままなのです。それどころか，これらの作品が同じ作家によって書かれたとはとても信じられない場合もしばしばあるでしょう。

［……］

そこであなたに懇願したいことは，第一に，この新しい全集で一定の内的関連にしたがって配列されているあなたの文学作品を，年代順に並べ，作品の素材となっている生活環境や心の状態，さらにあなたに影響を与えた手本，あなたが準拠された理論的原則などを，ある程度関連づけて打ち明けていただけないかということです。（16–9f.）

このように，ゲーテは読者からの要請に応えるために『詩と真実』の執筆にとりかかったと報告しているのだが，実際には，この欲求はまさにゲーテ自身が自分の全集を前にして抱いた不満に由来する架空の設定であった。

ここで問題にされている 12 巻の全集とは，コッタからゲーテが初めて出した第 1 次全集のことで，1806 年から 1810 年に刊行されたものである[12)]。この全集には，『ファウスト』第 1 部 *Faust I*（1806 年）が初めて

12）1809 年に単独で出版された『親和力』が全集の 13 巻目に収録され，最終的には全 13 巻となる。

公表された以外にめぼしい新作はなく，これまでの作品を取りまとめたものにすぎない。この全集を編集している段階で，ゲーテは自分の作品が全体として首尾一貫せず，散漫で，断片的であるという不安にかられ，しばしば印刷をしぶることがあった。しかし当時の不安定な政治情勢のなかで，ゲーテはぐずぐずしてはいられないとも感じていた[13)]。しかもこの時期，ゲーテは個人的にも死を何度も身近に体験している。1805 年にシラーが死去，翌年には，ゲーテの家に押し入った略奪兵から危機一髪，自分を守ってくれたクリスティアーネと戦時下で結婚した。1807 年にアンナ・アマーリアの死，翌年には母の死を経験するゲーテは，ちょうど 50 代を終えようという自身の年齢を考えないわけにはいかなかっただろう。そこで「自伝を書く」という，少し前から抱いていた構想が一気に高まったと推測することは可能である。

ちなみにゲーテが自伝に興味をもつきっかけのひとつに，1796 年からゲーテ自身が手がけたチェリーニ自伝の翻訳があった。このゲーテの趣味は，しかし，時代の関心には決して一致したものではなかった。当時の読者たちが期待していたのは，波瀾万丈の人生を生き抜いた男の，ピカレスク小説ばりの回想記ではなく，ルソーの『告白』に代表されるような，誰とも違う唯一の私のありのままの姿，著者の内面世界を赤裸々に告白するような自伝であった。しかし，ルソー的告白にゲーテは反発する。「告白を書く者はみな，情けない人間になる危険がある。病的なこと，罪深いことだけを告白し，美徳を懺悔することは決して許されないからである。」[14)]

同様に，ゲーテの自伝プロジェクトに含まれる旅行記をめぐっても，ゲーテは時代の趣味との温度差を強く感じていた。『年代記』の 1789 年の項目には，当時の旅行記の主流は，イギリスの小説家ローレンス・スターン Laurence Sterne（1713–1768 年）の『センチメンタル・ジャーニー』

13）ウンゼルト　前掲書　290–383 ページ（5 章）参照。

14）FA I, Bd. 14, S. 931.

A Sentimental Journey through France and Italy（1768 年）以来，もっぱら旅行者自身の感情や物の見方の叙述であったと報告されている。しかしゲーテはこれにも反発し，「これに対して私が原則としたのは，自分というものをできるだけ否定し，客体そのものだけを可能な限り純粋に自分のなかに受け入れるということであった」（14–15）とコメントしている。

話を元にもどすと，58 歳で自伝を書き始めたチェリーニをどれほど意識したかはわからないが，1802 年，52 歳で初めてシラーに自伝を書くことへの関心を告白し[15]，1809 年秋，60 歳のゲーテは『詩と真実』の最初の構想をメモに残した。1810 年 5 月，第 1 次全集の刊行が終わるやいなや，ゲーテはコッタに自伝出版の相談を持ちかけ，承諾を得ると瞬く間にその準備にとりかかった。翌年 1811 年秋に第 1 部が出版，1812 年冬に第 2 部，そして 1814 年春に第 3 部が出版される。

1809 年の最初の構想を見ると，当初，ゲーテは自分の全生涯を記述するつもりだったことがわかる。しかし 1813 年，第 3 部を執筆している段階で，1775 年，つまりヴァイマルに向かうまでで，『詩と真実』としては記述を一段落させることに決めた。第 4 部は元婚約者リリーに対する配慮から執筆が長く中断することとなった。もっとも自分の全生涯を対象とする希望はまだ捨てられておらず，ゲーテは次にイタリア旅行時代の執筆準備に入る。すでに述べたとおり，最終的に『イタリア紀行』にまとめられる記述も，最初は「わが生涯から」というタイトルで出版され，彼の自伝プロジェクトの一環として企画された。完成し，出版されるのは 1816 年，17 年のことである。そしてこれらの 2 冊は，すでに刊行が始まっていた第 2 次ゲーテ全集の一部となった。1812 年初頭，ゲーテは早くも第 2 次全集の計画をコッタに持ちかけたが，コッタは混乱した政治状況を理由に，この申し出を断った。もちろん第 1 次全集との間隔が狭すぎることも大きな要因であった。1814 年，再度のゲーテからの要望に対して，その年の終わり，ようやくコッタは承諾の返事を返した。ゲーテは新しい

15）1802 年 1 月 19 日付け，シラー宛て書簡。FA II, Bd. 5, S. 215.

全集の「売り」として，自伝的著作『詩と真実』が期待通りの効果を発揮したので，新しい全集でも読者の期待に一層応えるつもりであることを強調している[16)]。

ここで，先に紹介したように，「成立順に作品を並べて欲しい」という手紙が届いたというのである。この手紙は本当に「おせっかいな読者」から届いたものなのだろうか。『詩と真実』同様にゲーテのフィクションにすぎない可能性もあるだろう。しかし，いずれにしてもこの要求に応じて，ゲーテは 1816 年，『詩と真実』よりずっと簡潔ではあるが，同様の目的に適った一本の論文を掲載すると発表したのである。この論文は，自分の作品と生涯とを年代順に概観できるような年代記と解説文によって構成される予定であった。確かに 1817 年 7 月 15 日以降，日記には年代記の仕事についての記述が見られるが，しかしこの作業はやがて中断されてしまう。全集の刊行が終了しようという段階でコッタに指摘され，ゲーテは慌てて作業を再開させた。しかし結局，このような企画は困難であり，当初の約束を果たすことができないという内容の釈明文に続き，成立年と作品名だけの年表が掲載された。

さて，ここでようやく，話の発端である 1822 年のアルヒーフ誕生に話がもどってくる。小論「詩人・作家のアルヒーフ」のなかで，ゲーテはこの第 2 次全集について次のように記述している。

> 20 巻本の文学的著作を私のまえに順番に並べてみる。とても異なる仕事がすぐ隣に並んでいたり，詩的効果とは矛盾するような作品もなかにはあるので，もし，自分の精神そのものの衝動にしたがいながら，かつ世間の要求にも触発されて，あれもこれもと試みた人間，休養するようにと許された時間までさまざまな活動を行なった人間が非難されるとすれば，私は，散漫でばらばらの活動であるという非難を恐れずにはいられないであろう。（14–573f.）

16）1814 年 12 月 21 日付け，コッタ宛て書簡。FA II, Bd. 7, S. 385.

結局，自分の第 1 次全集を前にして統一感がなく断片的だと感じた不満は，第 2 次全集が完成しても解消されずにゲーテの心に残っていた。しかしゲーテは，中断を余儀なくされた『詩と真実』第 4 部執筆を除いては，同様の密度で自分の生涯と作品との相互関連を記述しようと試みることはなかった。その代わり，自分の人生を年代順に簡略に記述する年代記スタイルを新しい自伝プロジェクトのために採用したのである。

「詩人・作家のアルヒーフ」の次に置かれた 3 番目の小論「簡単な人生告白」に，第 2 次全集と『年代記』の関係が詳しく紹介されている。

> 親しい友人やそれほどでもない友人の望みにしたがい，いくつかの私の詩について説明をしたり，人生に起こった出来事から明らかな弁明をすることを決心するたびに，もはやはっきりと心に浮かんでくることのない時代へと私は戻らなければならなかった。そして，それゆえにいろいろと準備をしなければならなかったが，そこからは望まれた結果を期待することはできなかった。それにもかかわらず私は何度か試み，しかし誰もその試みで満足することはなかった。（14–575）

自伝的著作の効果を強くアピールしていた第 2 次全集企画当初とは調子が異なり，ここでは，これまでの自分の誠実な告白は期待したような効果を発揮できなかったと診断されている。そして次のように続く。

> このような友人の無理な要求は今もずっと続いている。しかし別の心優しい人々は，もし私が，以前にやったように作品も人生の出来事も成立順に一列に並べて提供しようと決意し，しかし今後は，以前私が何度かやったような誠実な告白をあちこちに差し挟むということをしないとすれば，自分たちはもっと満足するでしょう，と断言してくれました。（Ebd.）

こうして「誠実な告白」抜きで作品と人生の出来事とを年代順に記録していく年代記の形式が，ゲーテの自伝執筆の新しいスタイルとなった。手はじめに，第 20 巻末の例の作品年表が生まれた。ゲーテはこのプロジェクトを続行するために，以前にも増して詳細な日記をつけ，多数の資料を取り寄せ，その結果，ついにゲーテの書類棚は彼ひとりの手には負えなくなった。そこでクロイターが雇われ，若い書記はその仕事を立派に成し遂げたのであった。

もちろんこのアルヒーフは『年代記』のためだけに活用されたのではなく，ゲーテのその後の執筆活動のすべての土台となった。何より彼はこのアルヒーフから，第 3 次ゲーテ全集，つまり 40 巻の決定版全集を編集するつもりだった。詳細な構想は 1825 年にできあがり，翌年，『教養人のための朝刊』掲載の広告には，40 巻の内容も開示され，そのうちの 2 つの巻が『年代記』に割り当てられた。広告文には「わが生涯の年代記」Annalen meines Lebens と告知された。全集の刊行は 1827 年から始まり，1830 年に全 40 巻の刊行が終わる。『年代記』は 1830 年に出版された。ゲーテ 81 歳。最終タイトルは『私のその他の告白の補足としての年代記』*Tag- und Jahreshefte als Ergänzung meiner sonstigen Bekenntnisse* となった。

3 『詩と真実』から『年代記』へ

『年代記』には 1749 年から 1822 年までの 73 年間のゲーテの活動記録が記されている。『詩と真実』で試みられたような彼の文学作品と人生との内的関連は問題にされず，主に文学活動以外の活動，公的な職務上の活動やヴァイマル劇場などの文化活動そして自然科学研究が中心的な内容を占める。フランス革命などの政治状況の記述も目立つ。制作にはアルヒーフの資料，手紙，日記が利用された。19 世紀に入ってからの記述のためには，とりわけゲーテ自身の日記が最大の素材となったが，その日記自体がすでに仕事，読書，訪問者，散歩，旅行，郵便物などに関する，非常に

ストイックな記録で埋められ，著者の内的告白であるとか，自己との省察的な対話といった内容は見当たらない。というのもゲーテは 1797 年以来，日記すら口述筆記させ，主観的要素が入り込むことを厳しく排除してきたからである。その日記から，項目別に主題をピックアップし，簡潔な文章をまたしても口述筆記させる。『年代記』はもともと贅肉のない日記をさらに「濃縮させたコピー」[17] のようなものとなった。しかも年代順に執筆されたわけでもなく，思い思いの年から，気ままに手をつけられた。年により内容の密度も不均一である。1822 年から 1825 年，ゲーテ 70 代半ばのことであった。

『年代記』のような著作を，あれほど全体の首尾一貫性にこだわっていたゲーテ全集において，どのように位置付ければよいのだろうか。ゲーテが自伝的著作に興味を抱いた経緯をたどるなかで明らかになったのは，常に全集の企画がゲーテに自分自身の作品や人生について省察するきっかけを与え，彼の自伝プロジェクトにも大きく関与していた点である。そもそもゲーテはゲッシェンから初めて自身の 8 巻本作品集（1787–1790 年）を出そうと決めたとき，自分の作品集を「わが生涯の総計」[18] と呼び，読者の反響をおおいに期待したが，結果はさんざんであった。「ドイツはもはや私のことをわかっていなかったし，わかろうともしなかった」（12–70）とゲーテは振り返り，しばらくは自分の生涯の全体を読者に伝える希望を失ってしまう。ウンガーの 7 巻本の新ゲーテ作品集（1792–1800 年）は全集という構想を持たず，新作ができるたびに個別に出版された。次にゲーテが「わが生涯の総計」を試みようと決心するのは，19 世紀に入ってからのことであり，しかもシラーに促され，ようやく重い腰を上げ

17）Nachwort zu *Tag- und Jahreshefte* von Waltraud Loos. In: *Goethes Werke. Hamburger Ausgabe*. Bd. 10. Textkritisch durchgesehen von Lieselotte Blumenthal und Waltraud Loos, kommentiert von Waltraud Loos und Erich Trunz. München 1988, S. 738.

18）1788 年 2 月 16 日付け，カール・アウグスト公宛て書簡。FA II, Bd. 3, S. 388.

たのだった。この第1次コッタ全集への不満，あるいはそれを補足したいという欲求から，最初の自伝プロジェクト「わが生涯から」シリーズが始まる。勢いに乗ったゲーテは，自分の作品と生涯の関連をより読者に伝えられるような第2次コッタ全集の編集を急ぐ。このとき『年代記』構想が芽生えたのだが，これは「わが生涯から」シリーズとは形式・内容ともに随分異なるものとなり，最晩年まで公表されることはなかった。ゲーテの企画した最後の第3次コッタ全集では40巻の半分が広義の意味で——ゲーテの自伝制作の前段階としての他者の伝記を含んで[19]——自伝的著作であることを鑑みても，晩年のゲーテにとって自伝執筆が彼の創作活動の大きな部分を占めていたと言うことができる。

しかし，なぜゲーテは，自分の作品を年代順に配列させるという問題に執拗にこだわり続ける必要があったのだろうか。なぜ『年代記』構想は投げ出されなかったのだろうか。「私のその他の告白の補足」というには，『年代記』とその他の告白である「わが生涯から」シリーズとの密度の差は大きく，補足として並べて読むことはほとんど不可能に思われる。しかしこの2つの異なる自伝シリーズは決定版全集のなかで肩を並べている。これによって，全集はますます不揃いな，矛盾する印象を与えてはいないだろうか——そもそも自伝プロジェクトの発端は，全集の一貫性のなさを弁明するために始まった試みであったのに。

自己の一貫性を証明するためのプロジェクトは，その方向性をいつ変更したのだろうか。『詩と真実』との関係において検討してみよう。

前章で見てきたように，ゲーテはいつも自分の全集を前にして，読者に一貫性のなさや断片的な印象を与えるのではないかと恐れていた。彼はまず，同時的に多方面へ向かおうとする彼自身の中心点，つまり自分の人格にその原因を求め，これを読者に説明しようとした。こうして『詩と真実』が執筆されるのだが，その計画に取りかかる以前の，ゲーテの最初期の自己描写の試みが残されている。1797年ごろ口述された未公表の小さ

19）Müller: a. a. O., S. 259.

な文章のなかで，ゲーテは，やはり自分がひとつの中心から同時に多方面へと向かいたがる性質の人間である，という自己診断をくだしている。

> 常に活動的で，内へ外へと作用する詩的形成衝動が彼の存在の中心と土台を形成している。こう判断すれば，すべてのその他の一見矛盾することがらも解決する。この衝動は休みを知らないので，彼は，素材もないままに憔悴してしまわないようにと，外に向かわなければならない。彼は観察するのではなく，実行せずにはいられないので，自分の方向と逆らっても外部に向かって働きかけなければならない。そのために多くの誤った傾向に進むことにもなった。技量を持たない造形芸術に向かったり，柔軟さもないのに政治活動に向かったり，十分な根気もなく学問に向かったり。しかし彼は，これら 3 つの事柄に対して有益にふるまい，素材や内容の現実性，そして形式の統一性と適合性をいつでも強く求めざるをえないので，そうするとこれらの努力の誤った方向性ですら，内外に対して実りがないということにはならないのである。
>
> ［……］彼の詩的形成衝動の特別な性格は，他の人たちが描写すればよい。しかし残念ながら彼の性格は素材にしたがっても，形式にしたがっても，多くの障害と困難さによって形成されたものなので，ようやく後になって，もっとも精力的に活動する時代が過ぎ去ったときに，ある程度意識的に作用できるようになるだろう。（4–2–515f.）

ここではまだ「彼」という三人称を用いることで，ゲーテは描写対象となる自分自身との距離を保ち，具体的な要素を一切排除して，客観的に自分の性格と行動を分析しようと努めている。そして彼のもっとも複雑な詩人としての性質を描写することは，この時点では諦められている。成熟期を過ぎてようやく自意識をもって活動できるだろうという予見どおり，60 歳になって，ゲーテは詩人としての自己を描写すべく，『詩と真実』に取

りかかるのである。

『詩と真実』では，ゲーテは「彼」ではなく，「私」として正面から自分を描写対象とした。あらゆる学問的・専門的な特殊性の垣根を排除し，文化史，芸術史，文学史，時代史を網羅する百科事典的な時代背景のもとで，詩人としてのアイデンティティが探求されるはずであった。しかし『修業時代』同様，いわばゲーテを主人公にしたこの「教養小説」も，楽観的で目的論的な発展モデルを最後まで遂行することはできなかった。このことは，第 3 部のために書かれたが，結局，採用されなかった序言のなかで，ゲーテ自身が植物のメタモルフォーゼとのアナロジーによって，説明している。

> この目の前にある 3 つの巻を書き始める前に，私はこれらを，植物のメタモルフォーゼが教えてくれる，あの法則に従って形成しようと考えた。第 1 部では，子供は四方八方へ柔らかい根を広げ，ほんの少しの子葉を発展させるだろう。第 2 部で少年は，もっと元気な緑色となり，徐々に，ますます変化に富んで形成された枝を広げるだろう。そしてこの元気な茎が，第 3 部では，小穂や花序をつくって花となることを急ぐ。これは希望に満ちた青年を表わすことになるだろう。［……］私が進まざるをえない次の時代に花は散るが，すべての花冠が実をつけるわけではない。そしてたとえ実をつけたとしても，ぱっとせず，ゆっくりとしぼんでゆき，なかなか熟成しないこともある。それどころか何と多くの果実が成熟する前にいろいろな偶然によって落ちてしまうことか。きっと手にすることができると信じている楽しみは，こうして台無しにされるのだ。（16–868）

ちょうどこの序言を書いていた頃，全生涯を記述するという当初の予定を変更し，ゲーテはヴァイマル出発前の描写で『詩と真実』を終えることを決心している。市民社会の土壌から育んできたすべてを投げだし，ヴァイ

マルへと逃走する主人公を，ひとつの連続的発展のなかにおさめることは不可能であると確信し，ゲーテの最初の自伝プロジェクトは終了したのである。

一方『年代記』がカバーするゲーテの人生は 1749 年から 1822 年までの 73 年間である。つまり『年代記』では，すでに「わが生涯から」シリーズで詳細に描写された時期についても省略されることはなかったのである。1749 年の自分の誕生から 1775 年にヴァイマルへ向かう決心をするところまで，『詩と真実』においてすでに 4 部に分けて（4 部はこの時点では未完成であったが）詳細に描写された 26 年間が，『年代記』では，ミュンヒェン版で 2 ページ足らずに集約されてしまう。『詩と真実』第 1 部序言で，年を取ると，思いがけない新しい作品で人を感動させるのは難しいが，「すでに生み出された作品を素材として取り扱い，それらの作品の最後に位置するものにまで仕上げていく仕事」（16–10）によって，自分をも読者をも楽しませることはできる，とゲーテは書いた。だが，さらに年を重ねたゲーテは，この最後に位置するものにまで仕上げられた仕事を再び解体してしまった。エッカーマンとの対話（1831 年 3 月 30 日）のなかで，ゲーテは「詩と真実」というタイトルについて，次のように説明している。

> 私はあの書物を『真実と詩』[20] と名付けました。それはより高い意図を通じて低い現実の領域から上昇していくからなのです。［……］私たちの生涯の事実は，それが真実だからではなく，何らかの意味をもっているからこそ価値があるのです。（19–446f.）

高次の真実へと高められた「わが生涯」を再び自らの手で解体して始まる『年代記』の破壊的行為のもとで，自己の一貫性の幻想は完全にくだかれ，

20）当初「真実と詩」とされていたが，音の響きの問題で最終的に「詩と真実」の語順となった。

断片的で，矛盾に満ち，自ら完成することを拒むようなゲーテの晩年のスタイルが決定的となる。

『詩と真実』では作者と読者との関係についての考察が度々くり返される[21)]。『詩と真実』執筆中のゲーテが，まだ読者と自分の作品との仲介は可能であると期待していたとすれば，『年代記』のゲーテはもはや両者の直接的な仲介をめざすことなく，そのような読者の期待を意識的に拒絶するように思われる。「創造的なものに関与するためには，読者は創造的でなければならない」[22)] というゲーテの要求は，『修業時代』から『遍歴時代』への移行のなかでいちだんと厳しくなる――つまり，ひとりの主人公の成長物語が，多数の登場人物の物語の断片的な寄せ集めになり，最後はアルヒーフに収められた資料の再編として，「永遠に活動し続ける生命」がほのめかされるにすぎなくなる――が，『詩と真実』から『年代記』への移行においても，同じ傾向を認めることができるのである[23)]。

最後に，『年代記』が 1822 年までぷっつりと終わっているのはなぜだろうか。外的な要因として，ふたつの理由が挙げられるだろう。第一に，それ以降の記録のために，ゲーテは自分自身で『年代記』を作成することはもはや不要であると確信したからである。自分の作品と生涯に関するあ

21）このテーマを考察しているのは Brude-Firnau: a. a. O.

22）1796 年 11 月 19 日付け，シラー宛て書簡。*Goethes Werke*. Hg. im Auftrag der Großherzogin Sophie von Sachsen. IV. Abteilung 11 Bd. Weimar 1892, S. 265.

23）『修業時代』から『遍歴時代』へ継続されたヴィルヘルムの物語が，その内容と形式を大きく変容させたことと，『詩と真実』から『年代記』へと継続されたゲーテの物語が，同様にその内容と形式を変容させていくことの関連を指摘したのは，数少ない『年代記』に関するモノグラフィーを著したゲオルク・ヴァッカールである。彼は「『詩と真実』と『年代記』の関係を『修業時代』から『遍歴時代』への連続とのアナロジーで考察すると，ふたつの自伝の関係はより明白になる。個人の発展的な描写に続いたのは，社会や世界のなかの人間の循環的（zyklisch）描写であった」と論じている。Georg Wackerl: *Goethes „Tag- und Jahreshefte“*. Berlin 1970, S. 123.

らゆる素材はすべてゲーテ・アルヒーフに保管され，将来にわたって整理されるではないか。自分の死後の取り扱いもやがて遺言に残される。後世の研究者は，ゲーテよりもずっと精緻な年代記を作成することができるし，実際，そうなった。ゲーテの作成した年表など，間違いだらけで今では役に立たないとみなされている。ひょっとするとゲーテが故意に隠蔽した記録までどこからか見つけ出されてくる。このようなゲーテの操作はしばしば批判の的ともなった。『年代記』を支えたアルヒーフ・システムは，ゲーテが自分の人生を思い通りに演出・編集するための道具であり，このシステムに適さないもの，混沌としたもの，矛盾すると判断されたものを徹底的に排除することによって，ゲーテは自己との和解，自己満足，アイデンティティの維持を求めた。そして『年代記』に残ったのは，ゲーテのねらいどおり，自分自身と完全に一致した肯定的な人格となることができた，というのである[24)]。確かにゲーテの人生や人格は矛盾に満ちていただろう。しかし『年代記』や彼のアルヒーフに認められるような，晩年のゲーテが確立した執筆スタイルや執筆システムが，ゲーテの自己弁明の手段として片付けられるのではなく，彼の晩年の創作原理との関係で再考されるとき，そこには和解や調和とは無縁の，粉々にされた自画像が浮かび上がってはこないだろうか。いや，これも『遍歴時代』同様，意図的にモザイク画として構築されているのだろう。

そして第二の理由は，1823 年からエッカーマンという対話相手を獲得したことである。『ゲーテとの対話』*Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens*（1836/48 年）をエッカーマンに託すことで，ゲーテは初めて「書く」という行為から完全に解放されて，自分自身を語る方法を見いだした。『詩と真実』第 2 部の最後に，「書くことは言語の乱用であり，静かにひとりで読むことは，語ることのあわれむべき代用にすぎない。人間は自分の人格をとおして，他人にできるかぎりの影響を与える

24）Sibylle Schönborn: „*Tag- und Jahreshefte*“. In: *Goethe Handbuch*. Bd. 3. Hg. von Bernd Witte u. a. Stuttgart u. Weimar 1997, S. 386.

のである」（16–479f.）という言葉が見いだされる。ゲーテは本当は書きたくなかったのだ。『詩と真実』で頻繁に回想されるように，聴衆の前で直接物語ることによって，あるいは朗読することによって人々に効果を及ぼすときほど，ゲーテが喜びを感じる瞬間はなかった。印刷されるなどますますいやなことであった。生涯に何度も全集を出し，ついにはドイツ初の著作権獲得まで果たしたけれども。確かにゲーテの人生は矛盾に満ちているのだ。